2023 年 8 月発行　No. 13

日本 DMORT ニュース第 13 号

DMORT の公式ニュースレター

目次

1. 会員の皆様へ:DMORT の災害医療における位置づけ(理事長)
2. 京都府警察 向日町警察署合同訓練について
3. 第 26 回日本 DMORT 養成研修会 IN 愛知
4. 京都府犯罪被害者支援連絡協議会の通常総会への参加報告
5. 自治体職員にも DMORT 研修が必要:香川県坂出市
6. 論文紹介
7.【研修のご案内】 2024 年度 2 月 4 日(日) 会場:日赤東京都支部
8. 事務局からのお知らせ

1. 会員の皆様へ;DMORT の災害医療における位置づけ

理事長　吉永和正

日本 DMORT 会員の皆様、コロナ感染の影響で当法人の活動も長く制限を受け、十分な活動ができていませんでしたが、昨年(2022 年)末当たりから大規模災害訓練、DMORT 養成研修会などを再開しています。今年は各地の大規模災害訓練への参加が予定されており、DMORT 活動も活性化してくると予想しています。登録会員の皆様にもできるだけ参加の機会ができるよう検討していますので、DMORT ニュースを始め、法人からのお知らせのご確認をお願いいたします。

DMORT は着実にその足下を固めてきています。活動開始した 2006 年頃では災害医療関係者もほとんど DMORT については知りませんでした。東日本大震災(2011)の頃になると一部の関係者から必要性が指摘されるようになり、現在では災害医療関係者はほぼ知っているという状況になっています。そのことを裏付ける史料を二つお示しします。

第一は 2022 年 3 月に日本医師会が発行した「新型コロナウイルス感染症時代の避難所マニュアル」の中で災害時に活動する医療チームとして「DMORT 災害死亡者家族支援チーム」が記載されていることです。DMORT が医療チームとして災害時に活動することを日本医師会が認知していると言えます。(図 1)

第二は聖隷福祉事業団のホームページ(https://www.seirei.or.jp/hq/service/volunteer/)です。

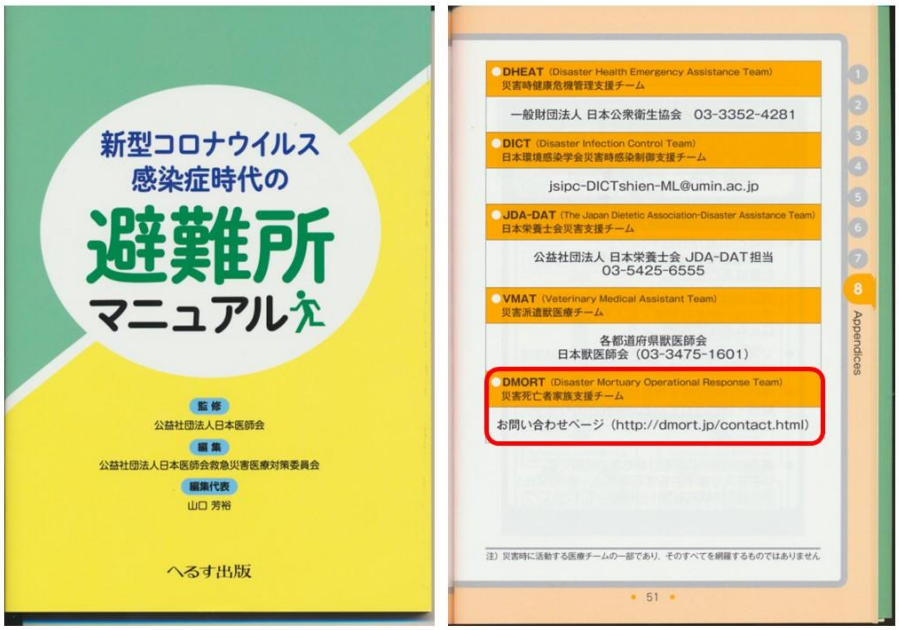

図 1　新型コロナウイルス感染症時代の避難所マニュアル（2022 年 3 月）

図 2　聖隷福祉事業団のホームページ

HP→「サステナビリティ」→「災害支援」→「支援の種類」で DMAT、DPAT などと並んで DMORT が紹介されています。（図 2）

探せば他にもまだまだあるかもしれませんが、DMORT は災害医療においてなくてはならないチームとして多くの関係者から認知されるようになってきています。災害対応には多くの人々が関わりますので DMORT を知らない人も多いと思いますが、会員の皆様からの広報をお願いいたします。

2.　京都府警察 向日町警察署合同訓練について

理事　黒川雅代子（京都支部）

JR 西日本が、福知山線脱線事故後（2005 年 4 月 25 日に発生　日本 DMORT 発足のきっかけとなった事故）に、列車事故総合訓練を開催しています。今年は京都府警察向日町警察署管内で行われたこともあり、同日午後から京都府警察向日町署と日本 DMORT の合同訓練を開催しました。

日にち：2023 年 4 月 28 日（金）

場所：京都府警察向日町警察署内

事案：列車脱線事故により死傷者多数発生

訓練：黒川より家族対応の講義を実施したのち、福知山線脱線事故で家族を亡くされたご遺族に当時のことを語っていただきました。その後警察と DMORT で家族対応のロールプレイング、グループディスカッション、コメントという流れで実施しました。

ロールプレイングの際は、訓練参加の DMORT 隊員は、警察と一緒に家族対応の役割を担うことが多いのですが、今回は、ロールプレイングを 3 回実施したうちの 2 回は河野理事、黒川が遺族役になりました。ともにこどもを亡くした母親役です。通常は、警察官と DMORT がどのように連携し家族対応にあたるのかということが、訓練の主になってきますが、今回は河野理事、黒川が遺族役になったため、警察官の方のみで遺族対応にあたられました。

日常的に起こっている事件や事故に、DMORT 隊員が出動することはありません。警察官単独で遺族対応をすることがほとんどであるため、より日常に近いロールプレイングの設定になっていたのではないかと思いました。

あと 1 回は、警察官が遺族役としてロールプレイングが実施されました。警察官が遺族役を演じてくださるときは、ご自身が過去に対応した遺族をモデルに対応してくださることが多いです。その場合は、遺族の気持ちをより疑似体験することにつながり、自分の対応をあらためて再評価することができるので、それもとても良い経験になると考えます。私は、普段、観察者としてロールプレイングに参加することが多いのですが、遺族役をすることで、グループディスカッションの際、「遺族の立場としては、こう対応して欲しかった」など、積極的にディスカッションに参加することができたので、役割を演じることも大切だなと感じました。訓練に参加した警察官の中には、遺族支援の経験のない方も少なくありませんでした。そのため、こういった訓練はとても重要であるとあらためて感じました。

京都府警察とは協定締結後、毎年警察本部との合同訓練以外に警察署で行われる訓練にも参加させていただいています。これからもこういった訓練には、積極的に DMORT が参加し、みんなで研鑽を積んでいければと考えています。

京都支部ができて、京都、奈良、滋賀の窓口を担うことになりました。前述したように京都府

警察とは、毎年いくつかの合同訓練を実施しています。京都支部としては、できれば多くの方に訓練に参加していただきたいと考えています。お声かけが直前になるかもしれませんが、ご連絡させていただいた際は、ぜひ多くの方のご参加をお願いしたいと思います。

3. 第 26 回日本 DMORT 養成研修会　IN 愛知

「DMORT 養成研修を終えて」

受講者　藤枝市立総合病院　増田喜昭

写真 1　愛知 DMORT 研修風景

まずは、先日の DMORT 養成研修ではロールプレイングや実際の体験談など、私にとって大変貴重な機会をいただけたことをこの場を借りて改めて感謝申し上げます。

ふりかえれば、DMORT を知るきっかけは東日本大震災でした。連日報道される悲惨な状況、増え続ける行方不明者数と死亡者数に私の心は揺れ、私は被災地へ赴くことで、被災者の孤独さ、不安、怒り、絶望といった、行き場のない思いを受け止めたいと思うようになりました。しかし、上司からは「DMAT 隊員が派遣されている中、ここ（勤務地）に残る選択も災害看護の一つ」と諭され、思いを実行するだけの知識も技術も態度も、私には足りなかったのだと思い知らされました。救急看護の奥深さ故に紆余曲折しましたが、今回の DMORT 養成研修は、あの時感じたわだかまりを私に思い起こさせ、（原点回帰することで、）今後目指すべき看護師としての在り方、そして災害との向き合い方を改めて指し示してくれたのかと思っております。研修（写真 1）の中では、講師の方々が「寄り添う」という言葉を多用していたと記憶しています。「寄り添う」ことは、災害死亡者家族支援の中核を担う概念だということが直感的にわかりました。研修を通して、「寄り添う：Presence」とは、実際の距離感に関わらず、対象者を慮り、医療者の思いやこころをそっと傍に（もしくは対象者のその内に）寄せる行為（こころの伴走者）であること、そのプロセスの中で医療者としての誠実な態度や対象者の衝撃を受け止める覚悟が必要であること、その結果見守られている（いた）という対象者のレジリエンス強化（回復）が生まれることを学ばせていただきました。

通常の医療現場では起こり得ない特有の緊張感や不穏さによって、災害に関わるすべての人が心身ともに疲弊してしまう中、一人が抱える負担を少しでも軽減できるよう、支援の輪の一端をいつか担うことができたらと思います。

日本 DMORT 愛知県支部事務局　名古屋掖済会病院救急救命部　新田満

昨年に引き続き、第 26 回 DMORT 養成研修会を、令和 5 年 7 月 22 日（土）名古屋掖済会病院で開催しました。今回も、愛知県内外から多くの申込みをいただいたため、定員を増やして対応し、最終的に 37 名の方に受講して頂きました。前回の研修から見直した点は、2 点あります。1 点目は研修会の資料で、2 点目はロールプレイの家族役の人数です。

研修会資料は、白黒刷りで写真も見にくいといった意見を前回の研修会アンケートで頂いていたため、カラー刷製本としました。これにより、受講者からは、“見やすくなった・冊子化されていて取り扱いと保存がしやすい・最後のページまで意義深いものでモチベーションがあがった”等のご意見を頂きました（**図 3**）。

ロールプレイングでは、定員増加のため家族役を 3 名に変更して行いました。DMORT 役 2 名・家族役を 3 名にしたことで、従来の 1 対1対応ではなくなり、困難さを体感して頂きました。
DMORT 役の受講者からは、“とても難しかったが、他のグループの対応を見て勉強になった”、“家族役の受講者からは、家族の思いを理解する良い機会になった”、“思っていたよりもいろいろな感情が起こるのだなと感じた”、“その立ち位置に立つことで、DMORT としての役割やケアを深く考えることができた”等の意見を頂きました。これらを通して、改めてロールプレイングでの疑

図 3　研修会資料（改訂分）

似体験の大切さを実感することができました。愛知県の最高気温が 33 度の中、白熱した演技で、リアルな体験をすることが出来たと思います。また、講師陣による『熱海』『熊本』実活動の報告では、“現場活動の大変さ、実際の動き等を知るいい機会になった”等の意見を頂きました。最後の質疑応答では、実活動へ結びつけるための要請のプロセスや院内での事前調整について等、活発な意見交換をすることができました。

さらに、知床遊覧船事故を受けて、海上保安庁の第 4 管区 3 名と第 5 管区の 2 名が、聴講に来てくださりました。今後は、警察・行政だけでなく、海上保安庁との連携の可能性も探れる機会を得たと思います。

受講生の積極性やスタッフの皆様のご協力により、無事に研修を終えることが出来ました。愛知で開催の研修会に御参加いただき誠にありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します。

4. 京都府犯罪被害者支援連絡協議会の通常総会への参加報告

理事　久保山一敏（京都支部）

このたび京都府犯罪被害者支援連絡協議会に日本 DMORT が参画することとなり、6 月 15 日に開かれた令和 5 年度通常総会に久保山が参加してきました。この組織は京都府警の外郭団体といえるもので、犯罪被害者の支援を目的として平成 10 年に結成されています。会員機関・団体数が 69 という大きな組織であり、この日の総会も京都市内のホテルの大きな会場を借り切っていて、マスコミの取材も多数入っていました。

議事は、まず令和 4 年度の活動報告からなされました。通常総会が 1 回、悪質商法被害者支援研究分科会が 6 回、性犯罪被害者支援研究分科会が 1 回開催され、会報は 4 回発行、市民向けのイベントが 2 回開催されたとのことでした。さらに令和 5 年度も同様の活動予定が議決されました。日本 DMORT は第八管区海上保安本部とともに、新規会員としてこの組織に入会したことになります。挨拶が求められたので、われわれは医療者が主体であることが特徴で、その視点での遺族支援を目的としていると説明しました。

会議後には、京都アニメーションの放火事件で亡くなった女性アニメーターの母上と兄上が講演されました。事件当日からその後にかけての心の動揺と事実を受け止めていく経過を落ち着いた口調で話されましたが、実体験の重みがずっしりと伝わるお話でした。お二人はこれまでにも講演の機会があったらしくまとまりのあるお話しぶりで、日本 DMORT のメンバーにも聞いてもらう機会があればと感じました。

京都アニメーションの事件の際には、日本 DMORT も遺族支援で活動できないか伝手を頼って働きかけを行いました。しかし当時は京都府警との有効なチャンネルがなく、果たせませんでした。今回京都府犯罪被害者支援連絡協議会に会員として参加することができ、いざというときの警察との意思疎通も円滑になるのではと期待されます。その後も各地で多数の犠牲者が出る事件が発生しています。日本 DMORT も活動対象を災害から犯罪・事件にまで拡げていく時期に来ているのだろうと思わされます。

5. 自治体職員にも DMORT 研修が必要：香川県坂出市

正会員　坂出市危機管理課危機監理専門官　笠井武志

日本では、毎年のように地震や風水害など自治体の能力を超える大きな災害が発生しています。特に平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、地震・津波による死者・行方不明者合わせて 20、000 人以上の人命が失われています [1)]。この年の 4 月に坂出市に危機監理室（令和 4 年 4 月 1 日以降、現危機管理課）が設置され、私は 34 年勤務した消防から危機監理室に異動になりました。消防では救急救命士としても勤務しており、惨事ストレスに興味を持ち消防職員や医療従事者の惨事ストレス研修などを企画し開催してきました。このころ災害死亡者家族支援チーム（以下、「DMORT」という。）にも出会い研修を受けました。消防時代は、亡くなった人を見ることも日常的にありました。しかし、市役所に勤務することになり亡くなった人を日常的に目の当たりにすることは行政職員には普通のことではないということに気付きました。

東日本大震災のあと、震災で甚大な被害を受けた岩手県釜石市の遺体安置所を取材した石井光太氏のルポルタージュ「遺体　震災と津波の果てに」（新潮社刊）[2)]をもとに、公開された「遺体」という映画で、自治体職員も遺体安置所で行方不明の家族を探しに来た人、遺体を引き取りに来た人たちのサポートする姿や遺体の回収に当たる自治体職員の姿を見て、実際に行政職員は遺体の対応や災害で亡くなった人の家族のサポートをするという具体的な認識がないのではないかと感じました。自治体には地域防災計画というものがあります。その内容は、災害の予防対策、災害対応、復旧・復興などの計画が記載されています。遺体対応も記載されていますが、数行程度で火葬が想定されていると思われ、遺体の回収や遺体安置所での家族の対応などは考えられてはいません。これらの内容は、被災自治体の災害対応記録や報告書にもあまり記載がなく、このような話はタブーとされているのではないかと推察されます。

そこで、本市の職員には、大規模な災害発生時には、遺体対応、検視、災害で亡くなった人の家族の対応、惨事ストレスの知識が必要だと考え研修を実施することにしました。これまで、3 回の研修を実施しています。1 回目は、平成 26 年 1 月に遺体対応・検視・惨事ストレスの研

修を行いました。遺体対応として東日本大震災で対応した自治体職員を探しましたが、まだ話せる人はいないということで、岩手県内の元消防長で福祉会理事長にお願いしました。検視は大学の法医学の先生、惨事ストレスは、総務省消防庁の緊急時メンタルサポートチーム [3)]のメンバーの臨床心理士にお願いしました。2 回目は、令和元年 10 月に遺体対応・DMORT・惨事ストレスの研修を実施しました。遺体対応の研修は、東日本大震災の時に応援に行った納棺師に尊厳を持った遺体対応の内容でお願いしました。DMORT の研修は、村上先生にお願いしました。惨事ストレスの研修は、1 回目と同じ緊急時メンタルサポートチームのメンバーの臨床心理士にお願いしました。3 回目は、令和 5 年 8 月に 2 回目と同じく遺体対応・DMORT・惨事ストレスの研修を実施しました。DMORT・惨事ストレスの研修については、2 回目と同じ講師にお願いしました。遺体対応の研修については、東日本大震災で被災した自治体（気仙沼市）の職員を対象に遺体対応についてヒアリング調査した（一財）消防防災科学センターの職員と約 10 年間探していた遺体対応の経験を話してくれる自治体の職員（気仙沼市）を招聘し、消防防災科学センター職員の気仙沼市のヒアリング結果を基にした講義から当時の遺体対応の流れや現場での取り組みなど全体像が把握できました。また、気仙沼市の職員の話から当時の心情や課題を聞くことができました。当時は、遺体収容、安置、管理、火葬、埋葬、改葬、捜索者やご遺族対応、窓口の受付等に関わる業務など多岐にわたり内容も具体的で想像を超えた対応内容でした。また、精神的負担もかなりあったと想像できます。今後、大規模災害時には、このような内容に関わることが想定されると受講者にも理解されたと思います。DMORT については、気仙沼市の調査報告や気仙沼市の職員の話を聞き、自治体職員は現場でいろいろな形で亡くなった人の家族と接する機会があることから自治体職員にも必要な研

写真 2　坂出市　研修風景

修内容だと考えます。惨事ストレスについても直接関わる可能性があることから必要な内容です。職員の不安解消や心を守るために事前に惨事ストレスについて知っておくことが重要だと考えます(**写真 2**)。

回答を得られた市職員(消防職員を含む)46 名のアンケート結果から研修内容については参考になった 83%。まあまあ参考になった 17%で、否定的な意見はありませんでした(**図 4**)。参考になった研修については、「すべて」と「DMORT」を合わせると 46 人中 34 人が、DMORT 研修が良かったと評価しています(**図 5**)。しかし、DMORT の認知度については、「あまり知らない」、「知らない」を合わせると 84%になり認知度がかなり低いことがわかります(**図 6**)。認知している人は、過去 2 回の研修の受講者と思われます。次に、このような研修の必要性については、「必要だと思う」、「まあまあ必要だと思う」を合わせると全員が必要だと感じています(図 7)。このことから、自治体職員においても DMORT の認知度を上げるためにも自治体向けの研修が必要だと考えます。

このような研修は、全国的にも自治体ではあまり行われていないと思われますが、本市では今後も計画を立て継続的に研修を実施していく予定です。

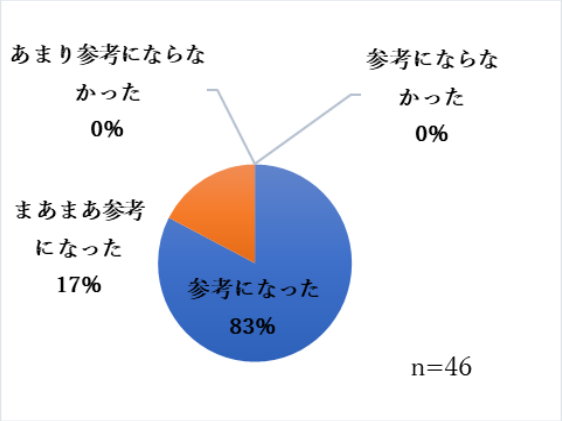

図 4　研修内容について

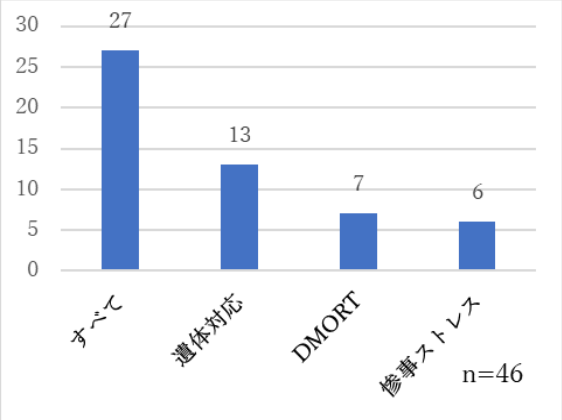

図 5　参考になった研修について

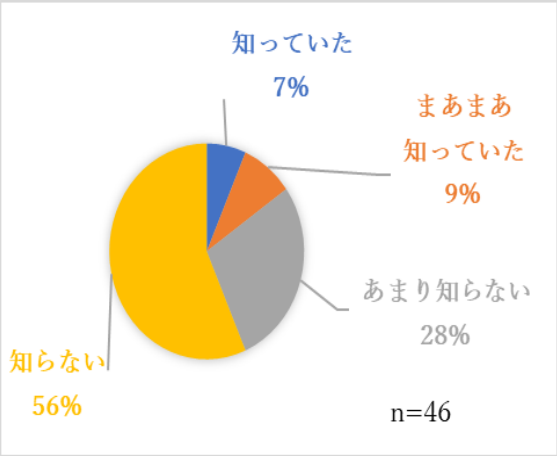

図 6　DMORT の認知度について

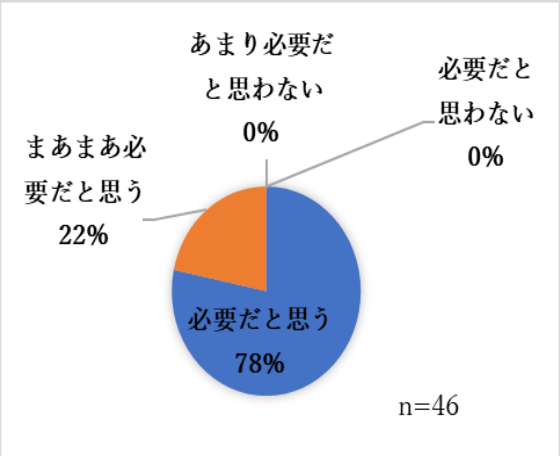

図 7　研修の必要性について

参考文献
1) 東日本大震災記録集 総務省消防庁第 3 章 災害概要,pp82-pp86,3.2013
2) 石井光太氏 ルポタージュ「遺体 震災と津波の果てに」(新潮社刊),2.2014
3) 総務省消防庁 緊急時メンタルサポートチームに関する参考資料,4.2019
https://www.fdma.go.jp/laws/tutatsu/items/jimurennraku01.pdf

6. 論文紹介

副理事長：村上典子

「遺体関連業務における公務員の惨事ストレス対策と遺族支援－DMORT 研修会導入の試み―」(勝島聡一郎著)

笠井氏の坂出市における試みに関連して、2017 年に横浜市の行政職員向けに行った DMORT 研修会について、勝島聡一郎氏が日本災害医学会雑誌(2021;26:35-40)に投稿した論文をご本人にも承諾を得て、要約する形で紹介します(これは J-STAGE で公開されており、閲覧可能です)。

勝島氏は当時、横浜市青葉福祉保健センターに勤務する精神科医で、2012 年に DMORT 養成研修会を受講、公務員にとっても有意義と考えられたそうです。当時まだ研究会だった日本 DMORT 研究会が全面協力し、横浜市職員向けの研修会が企画されました。プログラムは主に医療者向けに行っている DMORT 養成研修会に準じて、ロールプレイのシナリオは公務員向けに変更しました(論文中はロールプレイを「模擬訓練」と記載)。2017 年 1 月 25 日に横浜市鶴見区で開催された研修会は横浜市が主催で横浜市職員のみ 50 名の参加、1 月 26 日は青葉区歯科医師会が主催、横浜市青葉区役所共催で、参加者は歯科医師会関係者 29 名、青葉区内の市職員 29 名でした。この横浜市職員 79 名にアンケートを配布、回収率は 48 人で 60.8%でした。

アンケート結果から、市職員の様々な声を紹介します。

(1)不安感の自覚

・自分自身も被災している中で、受け止められるだけの心の余裕が持てるか心配である。

・慣れない職員が、このような行動、言動をすることができるか不安を感じた。

(2)取り組みについての認識

①遺族への認識

・遺族への気遣い、配慮、寄り添いの必要性を感じた。

・これまで、死亡者及びその家族に対するケアという概念は見落としがちなことであったと思う。

・遺族のやり場のない怒り、悲しみと向き合うストレスフルな業務であることを知った。
②遺族と職員への認識
・セルフケアに留意しなければならない。
・遺族の気持ちを第一に考えなければいけないと思うと同時に、職員同士の燃えつきにも配慮して業務にあたることが大切。
③模擬訓練
・模擬訓練を通じて、講演だけでは、おそらく気づけない親族の気持ちを感じることができた。
・遺体役を演じたが、その視点で遺族が悲しむ様子を見ると、こちらまで悲しくなった。遺体のためにも遺族への支援を精いっぱいやりたいと思った。
・家族役は家族の気持ちを改めて感じることができたり、支援者にどうしてほしかったかを感じることができた。遺体役は、亡くなった人の無念の気持ち、家族への思いや支援者の思いを感じることができた。
（3）心の準備と認識
①自分自身・遺族対応について
・遺体関連業務のイメージを持つことや、こころの準備が必要だと思った。
②非日常の大変な状況
・非日常の対応となること、職員も被災者となることからも、日頃から発災時想定のトレーニングを行う必要があると感じた。
・実際の場で泣かずにいられるか、自信がなくなるほどの事態を予想することができ、大変参考になる研修だった。
（4）積極的評価
①研修会全般について
・今までの研修会でもっとも辛く、実効性のある研修だった。
・必ずいつかはくる災害を想定して事前に行う研修としては、経験した中で一番具体的で考えさせられ、非常に有用な研修だった。
②対自分：心構え
・誰かがやらなければならない仕事なので、覚悟をもってやる必要があると思った。
・遺族のやり場のない憤りを行政が受け止めなければならないということを思い知らされた研修だった。
③対職員：拡大希望
・非常によい研修だったが、参加者・見学者が少なく、こんなに良い研修を受けないのはもったいないと思った。
・非常に参考になる研修だったので、計画的に全市を対象に毎年実施していければよいと思う。
④対家族

・今回の研修をきっかけに、関係者でディスカッションをするなど意識を高めていく必要がある。

勝島氏は論文の最後を次のように締めています。

「本研修会に参加した公務員は、遺族の心的回復に大きく寄与するであろう『遺体への尊厳を持った対応』『遺族に寄り添った対応』を学ぶことができた一方、公務員自身の精神的健康を維持するものとして、やりがい・心構えを学ぶことができた。本研修会は、遺体安置所での公務員の業務に加え、遺族への対応力向上が実現可能な内容を 6 時間でほぼ全て網羅しており、公務員の惨事ストレス対策をはじめとした支援者としての教育を行う上で、有用と考える。」

文献

勝島聡一郎、大貫義幸、豊澤隆弘、村上典子、吉永和正：遺体関連業務における公務員の惨事ストレス対策と遺族支援－DMORT 研修会導入の試み―」. 日本災害医学会雑誌 2021;26:35-40

7. 【研修のご案内】

以下の日程で第27回日本 DMORT 養成研修会を開催します。

日にち： 2024 年度 2 月 4 日（日）
会 場： 日本赤十字社東京都支部
※ 随時、情報発信予定

8 ． 事務局からのお知らせ

◆2023 年 8 月 22 日現在での会員状況をお知らせします。
正会員 29 名(うち 8 名は理事)、 登録会員 155 名、賛助会員 3 名(団体)です。
よく「自分は登録会員なのか、正会員なのか」というお問い合わせをいただきますが、基本的にはほとんどの方は「登録会員」となります（会費 3000 円）。 正会員は従来の世話人や、今までに訓練への参加や研修会タスクをして下さった方、積極的に運営に関わって下さる意思のある方などで、理事から推薦させていただいております（会費 1 万円）。

◆正会員名は、ホームページで公開 しておりますのでご確認ください。

◆当法人の会計年度は 1～12 月ですので、年が明けましたら会費納入をよろしくお願いします。また今年度の会費が未納の方はお振込みをよろしくお願いいたします。ご自身が会費

納入をしているかが不明の方は事務局までお問い合わせください。なお 2 年間会費が未納の方は退会となります。

◆訓練参加やタスク参加など、会員限定の特典があります。是非会員の継続をしていただけますようお願いします。

【理事名簿】

理　事　長　吉永和正（医療法人協和会副理事長）
副 理 事 長　村上典子（神戸赤十字病院心療内科部長）
理　　事　北川喜己（名古屋掖済会病院副院長）・愛知県支部長
久保山一敏（京都橘大学健康科学部教授）
黒川雅代子（龍谷大学短期大学部教授）
河野智子（京都第一赤十字病院看護部）
長崎　靖（兵庫県監察医務室）
山﨑達枝（四天王寺大学看護学部看護学科准教授）
監　　事　鵜飼卓（兵庫県災害医療センター顧問）

【事務局所在地】

住所 ： 〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-15-1 協和マリナホスピタル内
電話 ： 0798-32-1112（代）　FAX ： 0798-32-1222
E- mail: information@dmort.jp
日本 DMORT ホームページ　http://dmort.jp

◆編集後記◆

先ず、皆様にご挨拶をいたします。この第13号から NL の編集を担当させていただくことになりました山﨑と矢野です。12号まで副理事長村上先生がご多忙の中、発行に尽力を注いでくださいました。私どもまだ慣れない中ですが、村上先生が年に3回発行されたことを守りながら、会員の皆様にできるだけ多くの情報を速やかに提供していきたいと思います。

皆様どうぞ宜しくお願い申し上げます。

台風7号がお盆真っ只中関西方面を直撃しました。夏季休暇（お盆休み）の貴重な休暇に、旅行を早めに切り上げた方や旅行を見送られた方などいらっしゃるのではないでしょうか。これまでに経験したことのない強風や豪雨など被害状況が次々と報告され、今後も甚大なる災害が多く発生することでしょう。どこでどの様な災害が発生するかわかりません、皆様どうぞ気をつけてお過ごしください　（編集担当：山﨑・矢野）